

優秀賞

コロナが教えてくれたこと

熊本県 清水中学校 二年
田中 敬子

コロナが流行していく中で、感染者が徐々に増えてきた。自粛せず、無駄に遊びに行き感染したり、他人にうつしたりして感染者が増え、コロナ患者に集中するため救える命も救えず、命を選ばなくてはならないなど、悲しい状況になってきた。そして、医療が進んでいる日本でさえ、医療現場の逼迫が起こり驚いた。

ある日、母が記事を見せてくれた。コロナに感染した母親と、その娘が面会したというものだった。娘が先に感染し、回復したものの、母は重症化した。コロナ患者の方に会うとうつるため、普通は面会できないが、入院先の看護師たちが会わせてくれたのだ。娘は防護服を着て母親の手を握り、泣きながらうつしたことを謝り、そして今までありがとうと感謝を告げていた。その数日後、母親は亡くなった。

私は読んでいて、とても心が締めつけられ苦しかった。コロナという病気で、家族を看取ることができない世の中が悲しい。もし自分がその立場だったら、どうなるだろう。コロナが無ければ、亡くならなかった命なのにと。

このように医療現場は、言葉では表せないほど苦しい状況になっている。しかし、人々が後ろ向きになってしまう中、前向きに人を助けたいと思っている人たちもたくさんいることを、ニュースで知り私は勇気もらった。

私の大好きな従姉もこの春、医学部に入学した。従姉が医療の道に進んだ理由は、身近な人が看護師という影響もあり、小さいときから医療従事者になりたいと思っていたからだそうだ。誰かの役に立つことや、人を助けることができる仕事は限られているから、自分もそんな仕事ができたらいいな、それに自分が病気の知識を身につけておくと、いつか役立つかもしれないからと。

しかし、高校三年になり進路を考えると、コロナに感染したくないし、ニュースなどで病院の様子を見ていたら怖くなって、医療の道はやめようと思ったそうだ。級友の中にも家族に反対され、進路を変えた人もいた。でも医療従事者の中で、仕事を辞める人が多いというニュースを見た際、(このままだったら誰が患者を助けるの?) と思い、進路は変えなかったと話してくれた。

記事やニュースを見ていると、医療現場の人たちは患者の生死の瀬戸際で仕事をしており、医療従事者の強さ、すばらしさを実感している。私は将来についてずっと迷っていたが、従姉の影響もあり、医療の道に進みたいと強く思うようになり、医療についての本を借りて読んだりしている。コロナをきっかけに、私も今の医療従事者のように、病気の方やその家族を幸せにし、人の役に立ちたいと思った。

人類は感染症を繰り返しながら、医療も、人同士のつながりなども発展を遂げてきたと思う。今回のコロナも、悲しみやつらさの中から学ぶことがあったり、未来への希望を持てたりと、みんなの心にも何かがあったと思う。世界は大変な状況だが、コロナをきっかけに私は将来の夢を描き、歩んでいきたい。